

研究型から、プロジェクト型へ。 福祉マネジメント学科を象徴する科目です。

2022年、旧・臨床福祉学科は、福祉マネジメント学科へと生まれ変わりました。これからの福祉専門職には、ケアサービスの専門性だけでなく、地域社会をより良くするためのマネジメント力が求められているためです。その進化を象徴するのが「プロジェクト演習」*。いわゆるゼミナールで、論文講読や卒業研究を中心に取り組む科目でしたが、学生主体の活動を重視するスタイルへとシフトしました。今回は、宮本雅央准教授にゼミでの実際の活動について伺いました。

*3年次後期「プロジェクト演習I」と4年次通年「プロジェクト演習II」で構成。

暮らす人の思いに、着目する。

「プロジェクト演習」は、3年次後期からはじまります。今年度は12のゼミが開講されました。宮本ゼミのテーマは、ソーシャルイノベーション。地域社会をより良くするために、人と人のつながり方をアップデートする。そんなプロジェクトを自分たちでやってみようという活動概要です。この度は、2022年度に受け入れた宮本ゼミの学生5人が、3・4年次に取り組んだ内容をご紹介します。

3年次後期は、研究法・調査法の学習や文献講読に加えて、フィールドワークも実施しました。月形町、余市町、千歳市などへ足を運び、地域包括支援センター、福祉施設、そして博物館なども見学。地域ごとに異なる生活実態や、あまり知られていない事実に触れることで、自分たちはどんなプロジェクトを行うか、イメージを広げることが目的です。重要なのは、そこで暮らす人の思いや声に着目すること。学生はそう実感できたようです。

冬を迎えると、4年次から取り組むプロジェクトの素案を考えはじめます。私がアドバイスをを行ううえで大切にしているのは、自己満足になっていないか。学生自身が楽しむことはもちろん大事ですが、地域住民や専門職のためになることが目的です。数カ月の議論を経て、5人のプロジェクト名は「もっと知りたい向陽台」に決まりました。

もっと知りたい。知ってほしい。

向陽台とは、千歳市にある住宅街。3年次後期に訪れた場所のひとつです。移住してきた方々が多いこと、高齢化が進むエリアがあること、そしてエリアによって住民の年代が異なることが特性。その影響からか、住民同士の関わりを拒む方もいます。もし住民同士のつながりが増えれば、病気や



フィールドワークに臨む、宮本ゼミの学生5人。



住民の方々の声を聞くインタビュー。写真撮影も学生が担当。

怪我の重症化リスクを軽減することができます。

そこで学生は、向陽台で暮らす方々の声を集めたパンフレットを制作し、地域全体に配布するというプロジェクトを考案。向陽台には、こんな人が暮らしている。そのことを自分たちが知りたい、そして、ご近所の方々にも知ってほしいという思いから、「もっと知りたい向陽台」プロジェクトは生まれました。

プロジェクトの核となるのは、住民の方々のインタビューです。学生は地域包括支援センターの職員と直接やりとりを行って協力者を募りました。告知チラシを自分たちでつくるなど工夫した結果、9人の方々が協力してくれることに。もちろん、インタビューを行う日程の調整なども自分たちで行いました。そして、パンフレットの紙面構成には「フォトボイス」と呼ばれる手法を活用。文字だけではなく写真も効果的に使用することで、目を通しやすくなる、リアルな声を届けられるという効果が期待できます。

写真を撮る。声を聞く。

住民の方々のインタビューと写真撮影は、昨年9月に行われました。本学教員や地域包括支援センター職員は立ち会いません。ご自宅や指定された場所に学生が直接訪れ、向陽台のこと、ご自身の暮らしのことなどさまざまな話を聞いてきました。

Gさんは、まちの景色が変わって外出が怖くなったといいます。Iさんは、感染症の影響で来客が減ったことを嘆いていました。一方で、木の彫刻をつくるのが趣味のMさんや、旅行先で見つけたコーヒークップをコレクションしているYさん。住民の方々のリアルな暮らしが浮

看護福祉学部福祉マネジメント学科 准教授

宮本 雅央

2005年、本学看護福祉学部医療福祉学科(現・福祉マネジメント学科)卒業。2007年、同大学院看護福祉学研究科臨床福祉学専攻修士課程修了。秋田看護福祉大学、群馬医療福祉大学、青森県立保健大学の教員などを経て、2022年本学着任。



学生が制作したパンフレット「もっと知りたい向陽台」の表紙。

かび上がってきました。インタビューを経て、「これまでとは違うつながりが生まれてほしい」という学生の思いはより強くなったようです。

10月から11月にかけて、パンフレットを制作。住民の方々の声や、向陽台の自然豊かな風景を伝える40ページの力作が完成しました。また、他大学とのゼミ活動交流会に向けてプレゼンテーションの準備も行いました。パンフレットは後日、地域包括支援センターを通して住民の方々へ届けられました。そして、プロジェクトの趣旨と実施内容がまとまったその成果物は、後輩たちにとっても有意義な財産となります。

学生だから、できること。

宮本ゼミの活動は、学生が自分たちで考え実施するプロジェクトが中心です。もちろん指導教員として知識・技術のインプットやサポートを行います。実施内容には極力介入しません。それは、学生だからできることがあると信じているからです。

住民同士の関わりや福祉サービスを拒む方も、利害関係のない学生になら、心のうちを話してくれるかもしれません。その人の力になりたい、という学生の純粋な思いは、その人を、地域社会を動かせるかもしれません。私は本学科卒業生のひとりですが、学生時代にそのことを実感しました。現・学科長である志水先生のゼミで、山形県酒田市の飛島に1週間滞在し、生活実態と幸福感を調査するフィールドワークを経験。住民の方々と交流を通して信頼関係を築いていけたよごびは、今でも忘れません。

福祉マネジメント学科は、これからの時代の福祉専門職を育てる学科です。地域社会をより良くするためのマネジメント力を身につける、実体験の場の創出。それが、私の役割だと考えています。